此の坐禪觀念の御修行によつて成道なされたのに見ても、如何に之れが重きをなしてゐたかゞ分らうと思ふ。一體佛教の修行を眞面目に本氣に修行するとなれば、心を錬り精神を錬り、吾々に現在働いてゐるやうな此の相對的の心を全く靜めてしまはねばならぬ。斯く坐禪觀念によつて平日騷ぎ廻り浪立つてゐる心をスッカリ靜めて了へば、其處に必ず不思議の光が現はるゝに相違ない。

> 浪靜まらざれば
> 影を宿さず

譬へば池の水が浪立つてゐれば、池畔にある木の蔭も家の蔭も何物の蔭も映らないけれども、若し波浪がスッカリ靜まり返へれば、池畔の樹木であらうと家屋であらうと鏡に掛けて見るやうに映るであらう。我々の心も之と同じく、朝から晩まで波打ちつめてゐるから波に亂されて何物も現はれて來ないのであるが、若しその浪を鎭め返へすと、心の底から不思議な働きを現はして來るのである。彼の催眠術の如きは矢張り暗示によつて被術者の平素の心の浪をスッカリ鎭めて了ふものであるからして、始めて其處に不思議な作用を現はして來るのであらう。況んや佛教の修行に於て定に入つたなぞと云ふ時には、普通の心の上に生ずる一切の浪を鎭めて了ひ、煩惱を根絕して了つたのであるから、其處に不思議の作用と力とを現出するのは少しも怪しむを須ひない。佛教に於て神通力など、云ふのは、斯樣な精神上に現はる、一種の作用である。之れは啻に佛教に限つた譯でなく、印度の外道の修行者にも隨分あつたやうである。彼の福來博士が實驗してゐられる靈能者と云ふやうな人も恐らく此の一種であらうと思ふ。心の波を全く鎭め返へしてしまへば、從來肉眼で見えなかつたことでも見え耳で聞えなかつたことでも聞えると云ふやうな具合に、五官の作用を超越することも出來やう。即ち空間的に不思議な精神作用を現ずるのみならず又時間的にも現はれるであらう。

> 佛教の三世觀は
> 理論と實驗との
> 根據を有す

故に佛教に於て過去とか未來とか云つても決して理窟から揑ね上げたのではない。印度の外道の哲學書などを見ると、八萬劫の過去を知るなど、書いてあるが、それは誇張であるとしても、

兎に角二世や三世の過去位は修行によつて知ることが出來たのであらうと思ふ。故に強ち理論ばかりから說いたのではなくて舊は實驗上から來たのである。啻に實驗的に在ると云ふばかりでなく、その實驗を基として、それに完全なる哲學的說明を加へ精緻なる理論を組織したのである。此の點が佛教哲學の他の印度の外道哲學よりも優れてゐるところであらう。或は現今のやうに五官を以て唯一正しいものとしてゐる西洋思想に養はれた人は、過去や未來の在ることが現在五官の上に現はれないからとて否定し去らうとするかも知れない。併し吾々の心には常に浪立つてゐて寸時と雖も鎭まる時がないのであるから從つて吾々の記憶と云つても頗る亂れ混雜してゐるものに相違ない。そのやうな混亂した記憶に過去が浮ばないからとて、それを以て直ちに佛教の過去や未來を否定することは出來ないのである。

六　卽の修行

我々の今日有つてゐる心を鎭めるのが佛教の修行と云ふものであるが、佛教に於ては其の修行の發足から修行を成就して悟を開く時までの階段を次の六つに分類してゐる。

一、理卽　二、名字卽　三、觀行卽
四、相似卽　五、分眞卽　六、究竟卽

我々の本體は宇宙に充滿してゐて、天地法界悉く自己の本體であると云ふ理論を未だ聞かない時代が所謂理卽である。右の理論を理解して未だ少しも修行をせない階段が名字卽である。斯く學問的に自己の本體を究めた者が愈々實際の修行に取り掛つたのが觀行卽である。此處迄の階段の人間であれば、次ぎに生れ返つて來ても前生を忘れて了つて少しも記憶に上つて來ない。然るにそれ以上の相似卽の階段に入ると、未だ本體に對しての無明と云ふ根本煩惱は除かれないけれども、我々の現在有つてゐるやうな煩惱卽ち現象に對しての煩惱は除却されて了ふのである。此の階段まで修行が積めば、今日の我々にあるやうな心の浪は全く鎭まつて了ひ、此處に始めて前生が記憶に上つて來るのである。

天台大師實驗の法

此の六卽の修行も理窟ばかりでなく、之れを說かれた天台大師は自ら觀行卽までの修行に進んでゐられたといふところからして見ても、天台大師には實驗があつたのである。而して天台大師の師匠たる南岳大師は相似卽まで進んでゐられたとのことである。斯樣に自ら實際に修行の出來た人が說かれたことであるから、唯だ吾々が修行しないからとて、それで以て打消したりは出來なからうと思ふ。

前生を知る

前生が記憶に上らないのも、吾々のやうな修行をしないものには當然であるが、昔の書物など讀んで見ると隨分佛敎の修行者でなくとも、斯樣な實驗のあつた人があつたらしい。彼の「蒙求」と云ふ書物の中に、支那の鮑靚と云ふ人は年五歲にしてその父母に語つて言ふやう、自分はもと曲陽の李と云ふ家の子供であつたが、九歲の頃過つて井戸に落ち死んだ者であると物語つたから、父母は大變驚いて早速曲陽の李家を訪問して尋ねて見たところ全くその通りであつたと書いてある。こんな事は何も支那ばかりにあつたのでなく西洋にも隨分あると或る學者も言ふてゐた。吾々が眼を以て見たり耳で以て聞いたり出來なければ、直ちに嘘であるとか無稽であるとか言ふのは餘程淺薄な考であらうと思ふ。

汽船を始めて見た話

或る人の話に日本へ始めて亞米利加の蒸汽船が來た時に、それを眺めた一般の人々は、船の底に澤山の鯨が縛り付けてあつて夫等の鯨が噴き出す息が煙となつて見えるのであると言ふたさうである。今の人々はこんな話は嘘としか思へないのも尤もであるが、併し蒸汽船といふやうなものを一度も見たことなく、船と言へば櫓で漕ぐか帆で走るとしか考へてゐなかつた當時の人々にとつては無理もない考であらう。吾々のやうに嘗て修行をしたことのないものにとつて、前生の分らないのも恰度之れと同じてあるまいか。今日我々は毎日電信や電話を見てゐるから一向不思議とも思はないが、併し若し

も電信や電話の發明せられない前に、こんなことを說明されたつて屹度嘘だと言つて信じまいと思ふ。故に修行を自ら積むか然らざれば修行を積んだ人々の說を信ずるより外、吾々にとつて未來や前生を明知することは出來無からうと思ふ。かく申すと、前生を記憶して居れば隨分辛いかも知れないが、記憶してゐないのだからどうであつても一向差支ない、又未來も分れば隨分苦しからうが、少しも分らないのだから別に心配するにも當るまいと言ふ人があるかも知れない。併し斯樣な思想は少し自分を考へる人であれば、至つて淺薄な考であることが分らうと思ふ。之れは、今日自分が樂に暮せるから、前に嘗て苦辛したことや先祖が骨折つて呉れたことをスツカリ忘れたつて差支ない、又明日の日がどうなることやら分つた話でないから、兎に角今日は今日として大に愉快に食ひたい物を食ひ放題、着たい物を着放題に、心任せにやればよいと言ふのと同じであつて、極めて淺薄下劣な考と申さねばならぬ。

吾々の本體は宇宙と同大のものであるけれども、今申すやうに、業煩惱によつて小さい身體の自分となつて現はれ出たのであるが、然らば佛教に所謂佛とは如何なるものであるかと言へば、佛とても吾々の本體と何等異つたものでないと佛教では說いてゐる。佛とは何であるか分らないと云ふて、耶蘇教の神を以て佛と思ふて見たり、或は天地を以て佛と考へて見たりする人が隨分あるやうであるが、佛教で言ふ佛とはそんなものではない。

因緣所成

佛教に於ては因緣所成と云つて、如何なる物であつても原因無くして偶然に生ずる物があると見ない。大は天地より小は塵一つに至るまで皆原因と事情とあつて現はれたのである。此故に我々のやうな人間も人間となるべき原因と事情とによつて現はれ出で、佛も亦其の通りで、佛となるべき原因と事情とによつて佛となられたのである。言ひ換へれば、我々は煩惱によつて業を起し、其の業の力によつて斯樣な小さいものとして現はれたのであるが、佛は吾々と反對に煩惱を斷じて智慧と變じ、その智慧の力によつて法界に遍滿する佛として現はれたのである。本體に於ては吾々人間と

佛とは何等異なつたものでなく全く同一であるが、唯だその因緣事情の相違によつて、卽ち一方は業力により、一方は智慧力によつて、かくは無限の懸絕あり隔離ある境涯として現はれ出でたのである。

六度修行

然らば佛となる原因たる智慧の力は如何にして生じたかと言へば、それは修行に依られたからである。佛となつて現はるべき智慧を獲るに相當した修行を完成なされたからである。仍て佛敎に於ては通例、佛となるべき修行を六度と名付けて六つに分別してゐる。勿論修行は無數にあるのであるけれども、便宜上六ヶの行に總括して說いたまでゞある。その六度の行とは次のやうである。

一、布施　二、持戒　三、忍辱
四、精進　五、禪定　六、智慧

布施とは慈善といふやうなもの、持戒とは身心を嚴正に規律的に持すること、忍辱とは忍耐、精進とは奮鬪努力といふやうな意味である。併し世間の所謂慈善、規律、忍耐、努力とは餘程振合の違つたものであつて、例へば規則を守る持戒だけについて見ても、二百五十戒とか五百戒とか云つたやうな具合に、座作進退苟しくも一歩も忽にしない底のものである。早く言へば吾々の慈善、規律、忍耐、努力などは精々の所で佛敎の布施、持戒、忍辱、精進の眞似位に過ぎないであらう。先づこれ位の所までは眞似位は出來やうが、更に此の上の禪定、智慧になると眞似も到底出來無くなる。卽ち自分の一切の煩惱欲望の浪を全く鎭めて了ふのが禪定であつて、その上に不思議な光が現はれたのが智慧である。卽ち絕對智とか般若とか云ふもの、顯現した狀態が智慧である。禪定によつて吾々の心の浪を全く鎭靜して了へば、最早五尺の小身が自分であるのでなく、宇宙法界卽我となるのである。かく小我が絕對我にまで擴大されたところで、始めて前の布施、持戒、忍辱、精進といふやうな善根功德が究極され徹底されて絕對的に働くやうになるのである。されば吾々が此の五尺の小身を以て自分と考

へ、小我を以て自我の本體としてゐるやうな間に、何程慈善とか努力とか言つたところが、要するにそは極めて不徹底なものたるに過ぎぬ。扨て斯樣な智慧を有つて無漏業を修し上げた結果現はれたものが佛教で云ふ佛であるから、佛と云つても何も別に吾々と本體に於て全く相異してゐるものであるのではない。智慧を修し無漏業を修した結果として現はれたのが佛であり、之と反對に煩惱に汚され有漏業に染んだ結果現はれたのが我々凡夫である。斯く本體に於ては凡夫と佛と少しも異なつたところはないのであるけれども、その現はれたる結果から見れば無限の差異を生じたのである。

自力修行と他力の信仰

仍て吾々凡夫と雖も、凡夫となつて現れ出でた原因たる煩惱、有漏業を斷絶して了へば、直ちに凡夫の境涯を去つて佛となれること勿論であるから、況んや佛を見ることや佛の說法を直接に聽く位は造作のないことであるが、併しそれには殆んど吾々の口や筆にすることの出來ない大修行を無限の時間に亘つて積まんければならぬ。然るに現在の吾人のやうな肉體に囚はれ、實に微々たる小我を以て自我の本體として執着してゐるやうなものであつて見れば、自力の修行は愚か、迚も佛を見たり佛の音聲を直接聽いたり出來やう筈がない、是れ自力の修行の容易で無いと云ふ理由である。けれども佛教の他力門の側であれば、佛を見やうとするのでもなく、その聲を聽かうとするのでもなく、又自らの修行によつて佛とならうとするのでもなくて、既に佛となつて其の絶對智の上に現はれたる絶對の慈悲を以て吾々を凡夫の境涯より佛の境涯に引揚げ玉ふその力に依賴して佛とさせて貰ひ、悟を開かせて貰ふのである。自己の力といふ側に依るのであれば是非絶對智を自らに於て獲得するまでの大修行を必要とするのであるが、他力教の側であつては自己の力は何等要をなさないので、たゞ佛の力一つに依るのである。

されば親鸞聖人は「煩惱に眼さへられて攝取の光明見ざれども」と申されて、吾々に

大悲常に身を照らす

於ては一生の間晝夜夢寐の間と雖も、種々の煩惱に襲はるゝところとなつて、迚も自己の力によつては佛の御姿を拜したり佛の光明を目のあたりに見たりは出來ないが、然るにそれにも拘はらず佛の慈悲、佛の力に接することは出來るのであると其處を「大悲ものうきとなくて常に我身を照らすなり」と申されたのである。聲も無ければ形も無いけれども佛の力に攝取せられて、其の力が自分の上に現はれて來ると、未來に對して一點の疑念無く何時如何樣の事になつても、今度は間違なく佛にならせて頂くのであると悅びの念感謝の思ひが湧き出るのみである。斯樣に佛力を後楯とした生活が出來るやうになつたのが他力の信仰であり、佛の慈悲に攝取されたのである。自力門の側は佛の體を見やうとするから修行を積み智慧を磨かんければならぬのである。然るに他力門にあつては、佛の體を見やうとするのではなくて其の力に攝せられるだけである。愚痴のなり煩惱のなりで接するのであるから、親鸞聖人の如きは自ら愚禿々々と言はれて、

智慧も學問も往生のためには一切を放擲してたゞ一途に佛の力に縋り、其處に大なる安心を得て、常に無限の法悅と感謝との生活をなされたのである。

率レ性則仁明勇。觸レ處卽現。率レ情則牛頭馬面。
百千畜習。觸レ事卽現。

——(紫柏全集)——

第八章　三世觀と道德

不平を去る

今述べて來たやうに、我々には前生あり前々生あると云ふ具合に、何時から生れたり死んだりしてゐるのであるか分らない。又、未來に對しても、今日の有樣の儘で行つたならば、何時まで經つても死に代り生れ代つて連續するものであると分れば、我が現在の何事についても容易に諦らめがつくであらう。如何なる災難に遭ひ不幸の境遇に陷つても、前生を信じ未來を信ずる人であれば、今生に斯くの如き災難に出遭ひ不幸を嘗むるのも何か前生に於て善からぬ行爲があつて、それが今現はれたのであらうから、今更誰れを恨んだつて何となる話でもないのであるから、たゞ今生に於いて出來るだけ善事を行ひ身を愼しむより外に仕方が無いと諦らめがついて來る譯である。それと

同時に、今生に於いて不正の行爲や惡事をして置けば、假令此世では他人にも知られず從つて人の擯斥を受けず綺麗な顏して幸福の生活が出來るにしても、未來に於いては必ず然るべき結果を受けなくてはならぬと大に懼れ愼しみ、出來るだけ人として完全の生活を送らうと心懸ける。此點から見ても三世を信ずることが吾人にとつて如何に幸福であり如何に利益であるか殆んど測り知るべからざるものがあらうと思ふ。

他人の觀方

たゞ單にこれだけに止まらず三世の信念を有つて居れば、前生或は前々生に於て人々より世話を受けたであらう御恩になつたであらうと、現世に於ける人々に對して恩を報いやうとする觀念が起つて來るに違ひない。一切の人、一切の有情に向ひ、冷酷な他人扱ひが出來ないやうになり、彼は前生に於て自分と兄弟の關係を結んでゐたかも知れぬ、夫婦の契を結んでゐたかも分らぬと、卑しい我利々々根性を起さないやうになるであらう。

心地觀經といふ經文の中には、報恩に關して細かく說いてあるが、その中に「一切の男子は皆悉く我が父なり、一切の女人は皆悉く我が母なり」と說かれてある。若し斯樣な考を以て一切の男子及び女子に對して行けば、冷酷の仕打の出來やう筈もなければ又不親切の事の出來やう筈も無く、一切の人に對して何となく一種の親しみ懷かしさを感ずることであらう。從つて三世を信ずることは道德の實踐上にも非常に力となつて來る。故雲照律師は常に此の心地觀經の語を固く自ら守つて人に對せられたさうであるが、苟しくも佛敎の信者であるならば矢張雲照律師のやうな考を有たんければならない。彼の奈良朝の高僧行基の如きは一生の間善根功德を積み、あらゆる慈善事業をせられて、世人より菩薩と崇められた人であるが、前に申した通り、烏の囀る聲を聞いても他人とは思はないで、前生には父であつたかも知れぬ母であつたかも知れぬと考へられたやうな優しい心を有つてゐられたればこそ、佛のやうな慈

一切の男子は父
一切の女子は母

悲の行が出來たのである。

世々生々父
母兄弟なり

又眞宗の開祖親鸞聖人は「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、いづれも〳〵この順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり」と申された。澤山の人々から種々の世話を今生に於て受けてゐるのであるが、考へて見れば今生のみでなく、前生に於ても前々生に於ても、父となり母となり、或は兄となり弟となり、夫となり妻となつて、互に緣を結び合ふてゐるのであるから、今度は彌陀如來の本願によつて佛とさせて頂いた上で、神通力を以て今迄親子となり兄弟となり夫婦となつて下された人々を悉く濟度しやうといふのが親鸞聖人の世間に對し社會に對する御考であつた。獨り行基菩薩や親鸞聖人に限らず佛敎信者であれば皆此の考を有つて居り、又かく考ふべきである。

日本道德の美
はしかりし點

元來日本古來の人々は皆此の佛敎の思想の影響を受けて、社會

に對する道德に何となく一種の美はしい氣風があつた。今日のやうに他人を見れば讎仇でもあるかのやうに冷やかな考を以て取扱ふといふやうなことは無かつた。平安朝の古今集などにある歌を見ても大抵此の優しい感じの現はれてゐないものは無いと云つてもよい位である。されば此の三世の思想がどれだけ日本道德に稗益して來たか殆んど豫想外なるものがあらうと思ふ。

楠公の死生觀

例へば忠義の典型となつて千載の下猶ほ三尺の童子と雖も其名を記憶せざるなき楠正成が湊川に一族と共に戰死せらるゝ場合に、七度生れ代つても朝敵を討たずば止ずと言はれた其の煌煌たる大精神は一體何から湧いたのであらう、此の大信念は何から芽を吹いたのであらう。若し公にして佛教の三世を信じてゐられなかつたならば、どうして七度生れ代つてもと云ふ精神が生じたであらうか。又此の一大確信が無かつたとしたならば、恐らく古今に稀なる大忠臣となつて千古の下國民の龜鑑となられはしなかつたであらうと思ふ。啻に楠一家のみではない、苟しくも過去の我國の忠臣義士は悉く、單に今生ばかりでない過去に於ても未來に於てもといふ強い三世の信仰を有つてゐなかつた人は一人も無いのである。啻に他人に對して水臭い考の起らぬばかりでなく、現に自分の親兄弟、夫婦に對しても、一世や二世の淺い緣でなく、永い永い間の緣が結び付き絡まり付いて今日此の緣を結んだのであると、實に何とも言へない親しさ懷かしさの厚い情を感じたものである。

床しき夫婦の契

今日であれば夫婦の緣にしても單に今生限りの偶然の關係としか考へてゐないからして、從つて面白く思はなかつたり氣に入らなかつたりすると直ぐ夫婦別れして何等怪しむことなきは、恰も路傍の人々と相會し相別れると何等選ぶところないは實に淺猿しい次第である。是れが以前であつて見れば、假令ひ今生に於ては夫婦の契を實際に結ばないとしても、一朝主君のため國家の爲めとなれば、夫婦の杯事だけ取交はしたゞけで、やがて彼世

に於ては夫と呼び妻と呼ばれて同じ蓮の臺に目出度い契を結ばうぞと、それを唯一の慰安として、出て行く男も見送る女も其處に無限の喜びと無限の希望とを懷いて、天遁主君のため國家のために、男は身を棄て、辭せず、女は美はしき貞操を守つて少しも悔いなかつたのである。又主從の關係でもさうである。一年や二年の關係と思へば主家のために一命を賭してまでもなぞとは夢にも考へられなからうけれども、二世も三世も能く〳〵深い緣が結ばれて今日の主從關係となつたのであると思へば、主家の一大事と云ふやうな場合になれば、

政岡の忠誠

彼の先代萩の政岡のやうに、可愛い可愛い一人の愛兒を刃に掛けてなりと、主人の命を救ふといふやうなことが出來るのである。中々一生や二生の緣だと考へてゐて、あれ程のことが出來るものでない。此の三世の觀念を有つことは、單に佛にさして頂く淨土に參らせて頂くといふ上に必要であるばかりでなく、現在の道德を實踐する上に於ても極めて大切のことであらうと思ふ。此の三世の信念が國民の頭の中に有ると無いとでは、國家の上にとつて餘程重大なる違ひを生ぜしむるであらう。

學者の慎しむべきこと

近來世間の學者などで、少し心のある人であれば、よし自分は佛教の信仰を有つてゐないにしても、前生が無いの後生が無いのと思ひ切つて公言する人は至つて少なくなつた。これは國民道德上大變結構なことであり、又苟しくも學者として國家を念頭に置く人である以上正に然かあるべきことであらうと思ふ。明治時代の西洋思想ばかりを吸收した學者であれば、佛教思想を全然排斥して、前生とか後生とかを否定することが恰も學者として偉れてゐる點であるかのやうに思つてゐたらしかつたが、だん〳〵日本の道德をも心に容れて物事を言ふ學者は前程に亂暴な事を言はなくなつた。何となれば三世は吾々の研究で以て無いと斷言出來るもので無い。斷言も出來ないことを捉へて、無暗に否定した處が、道德にどれ程の好い影響を與へるであらうかと考へて見ると、浮

浮した無責任の言を吐ける譯で無い。此の三世の思想がどれ位日本の道德の維持力に貢献したかは少し考へれば直ぐ分らうと思ふ。若し此の三世思想が全然無くなつて了ひ、さればとてそれに代るべき立派な道德觀念も出來てゐないとなれば、日本の道德は或はスツカリ地を拂つて了はないとも限らない。佛敎の三世觀をスツカリ打壞して了つて、倫理學だけで完全に道德を實踐出來ると云ふやうな偉い人があるかも知れないが、普通一般の者であれば、迚もそれは覺束ない。佛敎が日本へ渡來してから、此の三世の觀念が日本國民一般の頭腦に普及して、日本道德の維持に非常な力を振ふたとは中々想像も及ばない位である。故に今後と雖も、從來の道德を維持する必要ありとせば、必ず此の觀念を一般の國民に懷かせて行く必要があらうと思ふ。殊に佛敎を信ずる人であれば、自分のみならず、その家族は勿論子々孫々まで此の觀念を傳へることを忘れてはならぬ。啻に子や孫の爲めばかりでない、家の爲めであり國の爲めであつて、若し此の信念が消え失せて單に此世限りとなつたならば、必ずや我國民道德は衰頽して、やがて國家そのもの、運命にも關するであらう。

知恩報德は人倫の根源

三世の道理を信ずるとなれば、事々に恩を感じて、何人に對しても何れへ向ふても、どうかして御恩を報謝せんければならぬと云ふ觀念が生じて來る。道德の實踐に於ては、斯樣な報恩の觀念が根本である。學問や理窟から言へば色々高尙な奧深い道理もあらう、又今日の倫理學者に講義をさせたら色々の理論もあらうけれども、實際について言ふと、人から惠みを受けた、お蔭を蒙つてゐる、誠に有難い、どうかして少しなりとも報いたいと云ふ考は、此人生に於て道德を實行する上に、人間の道を踏んで行く上に、何よりも一番大切な心懸である。

恩を知るは大悲の本

「恩を知るは大悲の本なり善業を開くの初門なり」とも申して、恩を知るは、諸々の善を行ふ根本であつて、如何にするも感恩の心無くして道德を守ることは出來ぬ。感恩によつて我々の

情を溫めることが出來るのであるが、若し情を溫めることが無かつたならば、人間の美はしさ奥床しさは薩張り無いことになる。知識と學問とに任せて理論をひねくり理窟を捏ね返へしてばかりゐると、頭の中が冷え切つて少しも美はしいところ奥床しいところ溫かいところが無く、土で捏ね上げた人形のやうになつて了ふ。さうなつたら最後人情を基とした美德などは藥にしたくとも見當らない有樣となるであらう。人間となるために、人間の道德を修養するために、固より知識も必要であるに相違ないが、寧ろ知識よりも情を柔げて行くことが一番大切である。而して情を和げるためには、どうしても恩を思はなければならぬ。彼れには斯々の世話を受けたから、其の代り此方では此々の事をしてやつたと、勘定づくで掛かるやうになつたなら、人に對して溫かい情を有つたり美はしい行が出來たりしやう筈はない。自己といふ考を無くして、人から受けた恩を有難う思ふてこそ初めて立派な行も出來るのである。近頃は何事も科學的に研究したり計算したりばかりしてゐるものであるから、此の感恩が甚だ粗末になつて、何となく世の中が冷え切つた殺風景の有樣となるのである。これについて今の學問でも少し聞き嚙つた者が如何に恩を粗末にして以て得意になつてゐるか、よい例を聞いたことがある。

天下の大馬鹿者

先年私の知人が或國の非常な山奥の邊鄙の地方を廻たさうである。今日到る處日本には文明の惡い側の影響が行渡つて人情が荒み美風が廢れてゐるが、其の邊はいまだ餘程質朴の風俗が殘つてゐた。それでその邊のどの村へ行つて見ても、食事をする時には、誰れも彼も先づ箸を取つて戴き茶椀を取つて戴き、又食事が終ると前と同樣に箸や茶椀を戴く風俗が行はれてゐた。これを目擊した私の知人は、東京あたりでは見られない善良の風であると大變感心して廻つてゐた。するとその中或る村に着いて、村でも一二の富裕らしく見える或る大きい家に泊つた。此家では、どうであらうと見てゐると、矢張家族全體が上は主人より下は下男下女に至る迄皆前と同樣に、箸を戴き茶椀を戴いて食事し

た。併し此處に不思議なことには、家族と交つて食事をする一人の青年があるが、その男ばかりは箸も戴かねば茶椀も戴かぬ。一人だけ早く食つて了つて、其の儘フイと立つて行つてしまつた。是れを見た友人は東京あたりでは格別珍らしくもない寧ろ當り前のやうになつてゐるが、それにしても此の邊の村にしては少し變であると不審に堪へなかつたものであるから、後に此村の或る人に向つて前の青年について尋ねて見た。すると其人が言ふには「あれは彼の家の息子で、何でも久しい間遠い國へ學問に行つてゐた人であります。此頃は家に歸つて村の學校の校長さんを勤めてゐられます人ですが、中に豪い人です。恐らく此三四ヶ村では二人とない大學者でせう。だから今では誰れ一人として尊敬しない者はありません。誠にあの家では結構な息子さんを持たれまして」と一生懸命に感心して讃めてゐたさうである。此人は田舍の人で何も知らないから理由もなく唯だ學問をしたと聞いたゞけで無暗に感心してゐるのであるからその人は誠に無邪氣な純朴の善人であるが、併し件の青年は餘程の大馬鹿者である。何程の學問をしたか、どれ程の書物を讀んだか知らないが、高が小學校の校長である、それに自分をも顧みないで、少しばかり文字が讀める位を鼻にかけて、何代とかゝつて養はれて來た美風を一人で叩き壞はすやうな事をして得意になつてゐるとは何と淺猿ましい淺薄の人間ではあるまいか。苟りにも校長とでもなつたなら、かゝる善良の風俗は卒先して維持し奬勵するやうに心掛くべきが當然であるのに、此の態とは殆んど愛相が盡きて物が言へぬではないか。

學問した者の注意すべきこと

此の馬鹿な一青年だけでない、近來田舍から東京邊へ學問に出て來る青年は、多くは此男のやうなものばかりで、少し位の生學問を鼻にかけて、暑中休暇位に歸省すると卒先して日本の善良なる美風を破壞するに力めてゐるのである。斯樣な人間が多いからして、我日本の國が都會は勿論の事、田舍の隅々まで惡風が蔓延して日に月に國家が墮落して行くのであると考へると誠に寒心に堪へない心地がする。大恩受けた師匠さへも月謝で養

ふてやる位にしか考てゐない學生であるから、一椀の飯一杯の茶が何處からどうして出來たかと考へて見ないのも或は尤もであるかも知れない。食物に對して恩を思ふと云ふやうなことは實に些細のやうであるが、併し之れが一切萬事に向つて恩を感ずる本となるのであるを思はゞ決して前の青年のやうな眞似は出來無からうと思ふ。

辨當の殘りの處分

嘗て或る懇意の人と談じ合ふて大に愧ぢたことであるが、その人が尋ねるには「あなたは汽車中で辨當が餘つた時にはどうなさるか」と言ふことであつて、是れには私も答へに窮した。併しマア私のやつてゐるだけの事を話した。「實は私共は子供の時分から一粒の穀物なりとも粗末にしてはならぬと云ふ教訓を聞かされてゐることであるからそれを忘れた譯では無いけれども、何分辨當の殘りと云ふやうなものは乞食でも餘り快くは受けぬ。けれども金を出したものでもあるし、穀物をそのまゝ棄てることも勿體なうてようせぬ、と云ふて何ともして見やうが無いから、犬とか鳥とかの居るやうな處を選んで棄てゝゐる」と恥かしながら申した。すると其人は「實は私も困つてゐる、何かよい方法も無いかと會ふ人毎に尋ねて見るが、一向よい方法も無いらしい、そこで私は、同じ棄てるにしても、誰れが見ても氣持ちの惡うないやうに可成綺麗にして辨當箱を床几の上にその儘載せて置く」との話しであつた。斯ういふ心を持つてゐる人は今日では殆んど無くなつた。

光圀卿の人形

或る人の話に、水戸の光圀卿は、百姓が蓑笠着けて蹶を持つてゐる人形を澤山造つて之れを領内の士族に下されて、御飯を食べる時に、その人形を膳に据ゑて民の稼墻の辛苦を知れとの御沙汰があつたさうである。有繋は水戸黄門樣として天下の人民から父の如く敬慕された名君だけあつて、何から何までも行屆いた御方であると大變感心した次第である。

百丈の高風眞に仰ぐべし

それで私も此の食事についての御恩に關して、詩としては拙い

ものであるが、一首の詩を作つて、それを以て平素自分の心得としてゐるのみでなく、又家族の者共にも讀ませて注意をしてゐるやうな譯である。

田家重歳辛苦多。
我胡爲者飽且息。
一日不レ作一日不レ食。
載耕載擾汗滴レ鍤。
一粒之微難二坐時一。
百丈高風眞可レ仰。

之れは申すまでもなくお百姓が五穀を取穫れて下さる困難と云ふものは竝大抵の苦勞では無く、一粒の米と雖も辛苦の汗膏ならざるはない、然るに自分はどれ程價値のある人間であるか、お百姓が困難して作り上げて下された物を、自ら作る苦勞もせず耕やす辛酸も嘗めず、坐つて頂いてゐるとは實に申譯のない勿體ない次第であると省みた詩である。昔支那に百丈禪師と云ふ高僧が居られたが、自分の食ふものは自分で作り、自分の着る物は自分の手で作られた。それであるから毎朝早く起き出でて小便桶擔いでは百姓衆と一緒に耕作をやられた。所が和尚の下に修行してゐる澤山の雲水共は、どうも和尚があゝやられては自分達もユックリしてゐる譯には行かないと相談の結果、和尚が百姓をやられることを止める方法として或る晩のこと百姓道具を一切隱して了つた。翌朝和尚が何とせらるゝかと見て居ると、和尚は例の通り早く起きられて扨て仕事に取りかゝらうとせらるゝと、一も農具が見當らない。そこですぐ居間へ入つて坐禪を組んだまゝ、一日中茶一杯も湯一杯も呑まれない、たゞ坐つたまゝである。そこで雲水達も折角隱したものゝ大いに困つて、段々お詫びをして理由を尋ねると、和尚は「一日作らざれば一日食はず」と言はれたといふことである。兎に角吾々は此の百丈禪師の精神を體して、苟旦にも食事の不平を言つたりしてならないは勿論、充分氣をつけて萬事恩分を粗末にしないやうに心得ねばなるまいと思ふ。

第九章　力の生活

打算的報恩は報恩に非ず

斯様に三世に亘つて總ての人より恩を受けてゐるが故に、その恩を報謝しなければならぬと恩を知り德を報ずる心は、吾吾が人生に處して日々の道德を實行する上に多大の力となるものであり、此の心あつて始めて人間としての道をも守つて行くことが出來るのである。然るに更に根本に進んで、宗教の信仰があれば恩を感ずる上に於ても徹底的に恩を報ずることが出來やうと思ふ。宗教の信仰なくして、たゞ單に誰々には斯々の世話になつてゐる斯々の恩を受けてゐると云ふだけであれば、心底から恩分を感ずることも又恩に報いることも到底出來ないであらう。宗教の信仰があつて、此度自分が此世界を去れば其時には未來永劫に大果を得るのであると明かに感ぜられてくると、

其の上に始めて總ての恩を深く頭に感じられて來るのである。若し此處まで來ねば感恩と云ふたところが報恩と云ふたところが中々實行は覺束ない。何となれば、誰れに恩を受けた彼れにお蔭を蒙つたとそれだけ感じて居れば、矢張り其處に自分と云ふ考が附纏つてゐて、恩を感ずるとか有難いとか云つたところで比較の心が止まない、自分をスッカリ忘れて、受けた恩蒙つたお蔭だけが有難う感じられて來ないのである。彼よりは斯々の恩を受けてゐるが、併し自分の方ではそれに對して斯々の事をしてゐると云ふやうな具合に、どうしても自分の上に何かの取柄を作つて行く打算的の考が止みさうにも無い。自分は詰らぬ者である、何の取柄も無いものであると口には言ふてゐるけれども、詰まらないと云ふ中に詰るところを作り、取柄の無い中に取柄を作つて行きたいと云ふ念が止まない。これが普通我々共の人情である。

自力根性を棄てよ

仍て佛を信ずる上にも、喜ばしくならうとか、有難い氣持にな

らうとか、何とか取柄を作らうとする根性が止まない。だから他力の信仰と云つてもスツカリ自力根性を棄てゝ了ふのは中々容易で無い。彼の眞宗の信者が何時でも引掛つて苦しむのは何時も此點である。自分と云ふものは眺むべきでないと豫て聽いて居り乍ら、矢張り自分を眺めて、それに執着しそれを力とする根性が止まない。然るに眞宗の信仰を美くしく得られてくると、自分と云ふものには丸で目が著かぬやうになつて、唯々佛の慈悲の有難いこと尊いことのみが見らるゝやうになり、そこで始めて今迄は危く思ふてゐた心も消え去り、大丈夫と云ふ强い力を得ることになつて來るのである。恩を感ずるのも之と同じであつて、自分が未だ少し目の前にちらついて、惡い事をしたけれども併し斯々の善い事もしてゐるからと、惡いと感じながらもその中に尤もをつけたい心の止まない以上は、到底眞の恩を感ずることは出來ない。眞に恩を知るためには、心底から唯だ先方の御恩のみが泌々と感じられて來んければならぬ。かうならぬ中は迚も自分を棄てゝ了ふことは出來ぬ。眞宗の信仰で申せば、あら貴と

や有難やと念佛を唱へるやうになつてこそ始めて報謝の念佛と云へるのであつて、差引勘定のやうな念佛を稱へてゐる間は本當の報謝の念佛とは言はれない。初めからさういふ心を少しも持たないで居るのは餘程難しいからして、强ちさういふ心で念佛するのが惡いとは申さぬ、併し眞に恩を感じ、恩を報ずるやうになると、義理合でどうしやうの斯うしやうのと云ふ根性は毛頭無くなつて了ふのである。救けて頂く御禮に念佛を稱へるとか、自分が今度悟を開かせて頂くから念佛を唱へるといふやうな義理根性は一切無くなつて、蓮如上人のお仰つたやうに、義理も何も無い、唯だ有難さの餘り覺えず知らず念佛が口へ出て來るのである。

嬉しさの餘りの念佛

かく申せば、中々そんなことは難しいと云ふ人があるかも知れないが、必ずさうあらんければならないといふ譯ではない。初めの間は義理盡くであつても宜しからうし或は交換的であつても强ち惡いとは言はないけれども、報恩の眞意からすれば、有難さの餘り我知らず念

佛の口へ出るのこそ眞の佛恩報謝と言ふべきである。其稱名は、此度救けて頂くから慎しんで行かんければならないとか、善いことをせんければならないとか、そんな考で無くて、報謝せざらんと欲しても報謝せざるを得ないやうになつたのが眞の報謝である。初めの間は交換的や義理合であらうけれども、段々信仰を養ひ佛の慈悲を味つて行くと、我々凡夫のする仕事であるけれども、それが直ちに如來の行とも謂ふべき、自分と云ふ小さい根性を少しも混へない實に清淨潔白の報謝の行となるのである。

信仰の人は人中の芬陀利華

それで之れを經文の中には芬陀利華と云つて卽ち白蓮華に喩へてある。白蓮華は花の中でも最も清淨で一點の穢れもない清淨無垢のものであるが故に、それを以て信仰の人を喩へられたのである。世間の道德も、若しそれが眞の極點に達すればどうしても此處に至らなければならぬ。此の境地にまで到らねば、所謂「天地と其德を同じくする」と言ふことは出來ぬ。故に道德の本義に適ひ修養の極致に達するにも、他の方法によるのは駄目であつて、どうしても宗教の信仰よりしなければ、吾々一般の通常人には覺束ないのである。宗教の信仰が立派に獲られ其味ひが充分呑込めれば、清淨の行ひも自然と身に現はれ出でゝ、自ら道德にも適ひ人倫にも添ふことが出來るのである。

今日の學問と昔の學問

人間は常識さへ養つて行けば完全の者となれて、如何なる事に出遭つても大丈夫であらうと考へてゐる人が多いやうであるが、常識なんて云ふものはそれ程頼甲斐のあるものでは無い。常識以上に宗教の信仰を有つてゐないと、平生思ひも掛けぬ事件でも突發して來ると心がスツカリ崩れて狂ひ出さねばならぬ。常識など云ふものは謂はゞ學問上の理窟から得たもので、吾々の頭の上つ面に着いてゐるだけであつて決して心の奥底までそれで以て徹底させる都合には行かない。絶對的に駄目と申さないまでも兎に角今日のやうな學問や教育では先づ駄目と申すより外無からうと思ふ。何となれば今日の教育

とは小學校より僅か十年足るか足らずの學校教育の謂に過ぎ無い。而かもその十年間の學問にした處が、彼方も嚙り此方も嚙りと云つた具合の極めて淺薄雜駁のものたるに過ぎ無い。言ひ換へれば種々樣々の斷片的知識を處々頭の表面に塗り着けてゐる位のものであらう。斯樣な學問で以て、吾々の腹の中まで浸み込ませて、それで以て腹を造り上げたりは中々出來やう筈が無い。之に反して昔の教育は今日の學問のやうに間口は廣くなかつた、併し一つの事に向つて何十年といふ功を積んだのであるから從つて頭の底まで浸み込んでゐた。此故に昔の學者と謂はれた人は唯單に物を知つて居り、知識を蓄へてゐたばかりでなく、習得した學問から自分の一切の行爲が出て居つた。學問が自分の骨となり肉となつてゐた。彼の吉田松陰先生の如きも固より天性偉人の素質を有つてゐた人に違ひ無からうけれども、併し學ばれた學問の力が餘程與つてゐたに違ひない。所が斯やうな人々は如何なる學問をしたかと云へば、色々の書物も讀んだであらうけれども、道德の方が專問であつた。昔の儒教に自分の心を置いて、卽ち武士道に心を据ゑて、それで以て何十年となく功を積み心を鍊つて行つたものだから、頭の底まで學問が浸み込んで身になつたのである。以前の學問は何を勉强するにしても皆自分の心を修養するのが目的となつてゐた。從つて心を修養するには五年や十年でやれるものでないから一生を擧げて其方に努めてゐた。斯樣にして始めて能く傑出した人物となつたのである。卽ち學んだ學問が骨となり肉となり、學問をした甲斐があつたのである。

臂机を離れざること凡そ三十年

彼の宋の名高い學者であつた楊龜山と云ふ人は、其の臂が机を離れざること凡そ三十年とも傳へられてゐる位で、書物を讀んで讀んで讀み盡し全力を擧げて唯是れ研究にのみ熱注してゐたから漸く道に進むことが出來たさうである。此れ程に一つの事に身も心も傾け盡して、學んだ事が頭の先から腹の底まで行き亘つてゐるのでなければ、何事が起つても少しも動しないといふやうなことの出來るもので無い。僅か六年や七年頭の表面ば

かりで雜駁の知識を吸收したつて、それで以て人間になれたりするものでは無い。

非常時の用意

私の知人に學者もあり隨分名の知れた人もあるが、夫等の人の誰れに聞いても、最愛の兒を死なしたといふやうな場合になると、平素の學問や理論で固めた知識は三文の價値も無いと言ふてゐる、如何にもその通りであつて、如何程死についての理論を知つてゐても承知してゐても、愛兒の死に會したりすると心の中が搔き亂されて了つて、平生考へてゐた事がゞらりと豫期に反して粉微塵に碎かれるのである。中々學者でもあり名の顯はれた人であつても、いざとなると隨分狼狽へた態になるものである。されば、どうしても頭の表面に塗り付けてゐる知識や教育で以て、吾々の精神を完全に鍛へ上げることは出來ぬ。然るに之に反して宗教の信仰を有つてゐれば、此度は佛力で往生させて頂くのであると腹の底に大きい力が出來、假令如何なる變事に出遭うとも心がふら付いたり狼狽へたりしないで濟む。何か事に出遭ふ度毎に、自分には無意識であつても、信仰の力によつて諦らめと處置とが着けられるのである。兎に角、心の奥に徹底したものを有つてゐなければ、單なる知識や學問だけでは非常時に何等の役にも立たぬ。

速成信仰は用を爲さず

或る軍人の話に、戰爭の場合になると神經が興奮してゐるものであるから、佛教の從軍布教師や耶蘇教の牧師の宗教上の話を聽くと、平素宗教を馬鹿にして居た者でも俄かに精神上の安心が出來て大丈夫のやうにも思ふのであるが、併しそれはほんの一時のことで、いざ實戰となると、こんな俄細工では矢張一向役に立つものでない、然るに斯樣の際に說教や法話を聽かなくとも、平生家に居つた頃幼少の時分から段々と父母から言ひ聞かされた信仰を有つてゐる者であれば、實戰となつても少しも狼狽するところなく、念佛の掛聲勇ましく傍の見る目も羨やましい位目醒ましい活動をするものであると日露戰爭當時の實例を引いて話したことがある。實際その通りで、家庭に於て不知不

識の間に養はれた信仰の如きは平時は何の役にも立たぬやうであるが、いざとなると中々さうでない、腹の奥底から力として現はれ出るものである。之に反して唯だ一時の感情に馳られて、俄かに有難くなつたり嬉しうなつたりしたやうな信仰は、矢張り上塗の氣分に過ぎなくて實際の場合になれば一向力とならないのである。

眞の信仰

近來一般に普通の學問や教育だけで役に立つものでないと感じて來たものであるか、大分宗教の信仰が必要であると分つて來たらしいやうに思へる節も無いではない。併し宗教の信仰と云つても、中には一種自分の頭で作り上げて、それで以て有難がつてゐる人も大分あるやうである。自分で大丈夫と考へてゐても、眞に腹の底から出來上つてゐないと甚だ危いのである。又非常に悅び無暗に有難がつてゐても、それが自分の一了見でさうなつたのであると、矢張り有難いやうな一種の宗教的氣分とでも云ふべきものに過ぎなくて實に心細いのである。

先哲の經驗を基とすべし

一體宗教の信仰と云ふものは、同じ佛教であつても宗旨々々によつて幾分色合が異つてゐる。それは祖師の經驗を持つて來て自分の信仰を補ひ確める必要があるからである。祖師の信仰を少しも眼中に置かないで、我は我、彼は彼と云つた具合に、自分の頭一つをのみ賴りにしてゐると中々動かない確固たる信仰となるものでない。然らば祖師の經驗は何から出たかと言へば、自分が釋尊やその他の高僧方の經驗を基として種々やつて見て、是れでも心が動き、あれでも心が動いて、到頭遂に、是れでもうどうしても動かぬといふ處に達して、始めて人に向つて說き勸め、又それを以て一宗を開かれたのである。だから此の祖師の經驗を全く無視して、信仰は主觀的だなどゝ大變偉さうな事を言ひ立てゝ自分一人で、こんな所であらう、あれ位であらうと安心して見ても一向確固たる安心とはならない、だから宗教を信ずるにも矢張り一宗の法に據らんければならぬ。法とは、昔の偉い人々が自ら實驗を積んで定められたところのものである。故

に此の法を全く無視して單に自分一個の考に任せてやつてゐると、諸々方々に差支が生じて、どうしても徹底した信仰は得られない。古人が苦辛の經驗を重ねて、後世誰れが出て來ても動かすことの出來ないとなつて現はれたのが法であるから、さう誰れでも無雜作に法を勝手に作り又動かしたり出來やう筈が無い。斯樣に祖師先哲の經驗せられた所の法を能く味ふた上で、自分の經驗を以てしても其處まで達した時に始めて確固たる所謂金剛堅固の信仰が出來るのである。

心を虛しくして聽くを要す

斯く申せば、現在にある佛敎の何宗も時勢に適合せぬとか、現今の人間には適せぬとか又理窟を持出すかも知れないが、そんな事を言つてゐるのはまだ聽きやうが足らないからである、眞摯に自分を考へて見ないからである、自分の胸中を空虛にして能く聽いて見れば、必ず祖師の深い經驗に基いた宗敎を信ぜずにはゐられないやうになるであらう。坊主が馬鹿な事を言ふ位に聞き流してゐるものであるから一向自分の力とならないのである。

衣服と正體とを混雜するな

成程知識の無い宗敎家であれば、詰らぬ事も言ふであらう又馬鹿げた話もするであらう、併しそれは謂はゞ着物に過ぎないのであつて、着物はよし如何にも詰らなく又勝手に作つたものであるにしても、その本體その心は各祖師方高僧達が一生を捧げて親しく經驗せられたのであるから、其の心髓を味合ふて見れば、必ず自分も同一確固たる信仰に到達するのである。兎に角、宗敎の信仰は、獨りよがりに氣儘勝手に考へて居ても役に立つものでない。祖師の經驗を尊重して其の法に從つて眞の信仰を獲得せば、如何なる變事に出遭つても如何なる不幸に會しても、皆悉く自分の確固たる信仰に化して了ひ、信仰の力を以て切拔けて行くことが出來るのである。かうなつて始めて眞の佛恩にも氣付けば又總ての物に對しても眞に御恩が感じられて、小さい自分を忘れ去つて、眞理と自分とが同體となり同化して了ひ、其處に百姓は鋤鍬手に持ちながら、商人は算盤珠彈きながら、貴賤上下となく皆とりぐに己がじゞなる人生の生業

を勵みつゝ、

治世産業
皆是實相

彼の法華經に所謂「治生産業皆是實相」となり、今日の吾々の生活その儘が直ちに佛作佛行として悟に向ふ修行となるのである。願はくば差別卽平等の十方觀と、過去、未來、現在の三世觀とを基礎として成立する佛敎の信仰によつて日夜修養に心懸けられ、生きては皇國忠良の臣となり、死しては悲智圓滿の佛と同體の悟に住せられむことを冀望して止まない次第である。

力の生活 終

大正五年九月九日印刷
大正五年九月十一日發行

力の生活
定價八十五錢

發行者　東京市京橋區南紺屋町十二番地　增田義一
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎

不許複製
著者　前田慈雲

發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
電話京橋八七四・八七五・八七六・九八九
振替口座東京三一二六番

（日清印刷株式會社印刷）

日置默仙禪師述

錬膽術

十版　定價郵稅五十四錢五厘

二版　三號判六ポスクロー　美本

處世修養の活本領

膽成る處、其處に自ら大雄辯、大智略、大勇氣、大人格、大見識、大威嚴、大風采備り、死生の境を超脱し、凡ゆる煩惱執見を立處に一掃し、自他なく、憎愛なく、寒暑なく、苦樂なく、一切皆空、身心清淨、恰も中秋の月の如し、

本書は一代の高僧默仙禪師道を說くこと懇切、眞に師の警咳に接するの感あり、求道の士は本書に依つて宜しく悟道の大法を知るべし。

南天棒　中原鄧州老師述

大悟一番

稀世の名僧南天棒老師、心境は鏡の如く、心事は山の端の朧月に似たり。師や世の所謂口頭禪者流と同一視すべからず、その處直ちに人間精神の神髓を摑み、悟道の奧秘を披瀝す。

本書は百年容易に得易からざる老師の禪話集にして、趣味と實益との天泉にも譬ふべし。來つて禪の眞味を味へ。

錬膽徹底の大眞義

再版

南天棒　中原鄧州老師述

活才術

□定價六十五錢郵稅四錢□
□三六判綿クロース美本□

火に入つて驚かず、水に入つて惑はず、生死の岸頭に立つて悠々自適、隨意隨所に自在の妙境を現出す。此の超世逸論の大修養。此の千歲不磨の大活才。禪なる哉禪なる哉。

禪の極意は本書に盡く

□定價壹圓郵稅六錢□
□四六判綿布美本□

實業之日本社長　增田義一著

九版

青年と修養

□現代青年の活辭典□

定價壹圓五拾錢
郵稅十二錢
菊判上製函入

如何に世に處す可きか、如何に向上發展すべきか、克己心は如何に修養すべきか、意思は如何に强固にすべきか、膽力は如何に養成すべきか、就職の途は如何、凡そ青年の心を領する凡百の煩悶、憂惱に對して、最も明快にして適切なる解答を與ふるものは、著者を外にして斷じてある可からず。本書は青年に多大の同情と親切を有する著者が、多年の實驗により青年の針路を示し、修養を說きたるもの、一の空理空論なく、一々適切にして趣味ある實例を擧げ、微に入り細に亘る。本書は實に青年自らの必讀者たるのみならず、青年子弟を有する父兄、敎育家先輩も亦一讀せざる可からず。

大隈侯序
蘆川忠雄先生著

樂天の生活

七版
定價五十錢菊判
郵稅八錢

先づ樂天生活の本領を說き、次で之に基ける簡易生活の眞髓、天然美の影響、平和と歡喜、健康の關係、時間の使用法、富の使用法、雄大なる人格の修養法、實務の處理法、快活心の養成、社交の祕訣、家庭の圓滿讀書法等に就き、極めて明快詳細に記述したるもの。

□新渡戸博士の三大名著□

著者は

農學博士にして法學博士を兼ね、識、古今に亙り、德、一代に冠たり。左記三書は博士が熱血に成れる萬人必讀の活辭典にして、一度これを繙けば明鏡に向ふが如く、忽ちにして自己の歸趨を自覺す

一日一言

三十三版

△定價六十五錢
△郵稅四錢
△最新判三五
△總クロース美本

博士が有する高德のうち最も著しきものは世に對する同情なり。人に對する同情なり。博士、曩に自動車にて負傷し溫泉に遊ぶや、折柄訪ね來れる一青年の痛ましき半生の經歷を聞き、深く感動し、爾來世の爲、人の爲、精神的食料を供せんとして苦心淺からざるものあり。本書は卽ち博士が同情の結晶にして、一年三百六十五日にあてはめ、修養に關する博士の感想を記し、尙東西古今の金言、道歌を挾む。苟くも意義ある生活を營まんとする人は何人も之を讀まざる可からず。

縮刷修養

四十九版

△定價壹圓郵稅八錢
△ポケット型函入美本
△總革表裝三方金

本書は博士が四十餘年間の學問經驗を傾注せられたるものにして、品性、人格及び處世法に亙りて懇說せられたる古今獨步の名著なり。其の說明の親切にして同情に富める、その材料の豐富にして趣味深き、さながら滾々として湧き出づる天泉の甘きにも比すべきか。眞に每戶必藏すべく萬人必讀すべき活經典なり。

世渡りの道

拾六版

△定價壹圓七拾錢
△郵稅內地十二錢
△菊判上製函入
△紙數六百二十餘頁

本書は、「修養」の姉妹篇なり。共にこれ修養を說けるもの、實に異體同心の書なるを以て、「修養」を讀める人も亦必ず本書を讀まざるべからず。所說懇切を極め文章亦平明流麗にして、篇中溢るゝ誠意と同情とは直ちに博士に接してその高說を聞くの思あるべく、一讀直ちに世渡りの妙訣を覺り得べし。

意志の力

四版

安田善次郎翁述

定價六拾五錢　郵税四錢　新型總布

人生の成敗は意志の强弱に依つて定まる。失敗者は多く意志薄弱にして成功者は皆意志强固也。蓋し人生發展の根柢は是れ意志の力！本書は立身向上の青少年に取り一大福音なり。

□玆に二つの新泉あり。向上奮鬪の勇士は來り掬して其□

□前途を祝し、失意敗殘の人も亦汲んで其精氣を蘇生せよ□

努力

再版

男爵　大倉喜八郎翁述

定價壹圓　郵税八錢　四六判總布箱入

運命開拓の鍵は唯是れのみ。努力實行の宣傳者たる翁が、七十年の經驗を以て語れるもの。言々皆青年の血となり肉となる。蓋し出世唯一の滋養劑！懦夫も亦一讀奮起せん。

□男爵　森村市左衛門翁述□

奮鬪主義

再版

定價壹圓貳拾錢
郵税八錢
四六判總布

翁が七十餘年間の生活は奮鬪に初まり奮鬪に一貫せる活教訓にして、現代稀に見るの一偉觀たり本書の如きは是れ翁の胸底を語れる權威ある大主張。苟も活社會に活動するの士にして本書を備へずんばあるべからず。蓋し讀者を啓發する至大ならん。

人生の戰場に赴く勇士に本二書を餞す。請ふ愛撫せよ!!

獨立自營

十版

定價壹圓拾錢
郵税八錢
菊判總布

人格見識ともに我實業界第一人を以て目せらるゝ森村翁が七十年の奮鬪より得たる經驗を基とし立志、創業、實務、經營、奮鬪、良友、逆運、成業、處世等に就き縷々數萬言、悉く翁が肺肝より出づる熱誠にして、一讀翁の高風に感奮自立せざる者なし。

清貧論

三版

法學博士　奥田義人先生著

定價壹圓廿錢　郵稅八錢
四六判　總布美本全一册

黄金の奴隷とならんよりは寧ろ退いて清貧を守るに如かず。必らず本書を讀め。

質素勤儉の美風漸く廢れて、奢侈贅澤の弊習社會の上下に滲透せんとす。現代は是れ明かに經濟的競爭の時代にして富の力の無視せらるゝ時代なり。而も國富未だ充實せざるに濁富既に奢侈淫蕩の窮兒を生めり。源清からざれば流れ亦澄まらず。清富は獨り清貧より生る。著者は是れ東京市民が三度の熱誠なる請願默し難く、草廬を出で、終に市長の印綬を帶びし人、其の清廉は三尺の兒童と雖も之を知る。此の著者にして此の著あり。勤儉力行、生々潑剌の氣風を鼓舞し質素儉約の美風を興すは、是れ實に本書の使命たるなり。

自傷錄

再版

東京音樂學校校長　湯原元一先生著

定價九拾錢　郵稅八錢
四六判　總布美本全一册

一讀三歎　趣味津津たる修養隨意　嘖々好評

世態、人事に關する所感を大膽率直に披瀝し、活きたる修養の根本を說く。三十八章の談論、悉く直接、緊要の問題にして、觀察深刻、引例適切、文章暢達、以て永く机上の良書とすべく、自己の好伴侶とすべし。蓋し精神資料として滋養無比！

内容大略

自國製の文化と他國製の文化○藝術○論○遊人は何ぞ常識とは大觀すなる○○護書の是非○心○私立學校は必ずしも惡問題を獨立せしめず○官吏○對政黨○京にも田舍あれ○利用○論○美人論○節操を貴ぶべき女子○其他數十項

處世術

文學士　三輪田元道元生著

定價　六拾五錢　郵稅　四錢
三六判　總布美本　全一册

處世の方法を知らざる者は、恰も船に舵なく、車に輪なきが如し。立身成功の秘訣は本書にあり

再版

本書は決して世にありふれたる、輕佻浮薄なる机上の空論を述べたるものにあらず。讀んで直ちに實行し得る實際的世渡りの道を說けるもの。說明又平易簡明なれば、何人にも了解するを得ん。立身成功を望む者は速に本書を讀み處世の道を知られよ。

奮鬪の教訓

ルーズヴエルト氏原著

山崎梅處先生　松宮宇一郎先生　共譯

本書は實にルーズヴエルトの奮鬪經歷を基として大丈夫の本領を說き、理想的品性を論じ、活動的人物の資格を述べたるものにして、立論堂々、所說該博、その奮鬪的熱誠は紙上に橫溢して字々活躍し、一讀人の肺腑を突く。譯文亦流暢、著者の名を耻めず。

定價壹圓廿錢　郵稅拾貳錢　菊判

人性論

忽ち再版

學界の權威 東京醫科大學教授 醫學博士 永井潛先生著

千里の馬は常にあれども伯樂は常にあらず。偉大なる問題は到る所に横れども之に充分の解決を下し得る人は極めて尠し。

『人とは何ぞ』是れ實に人間が有する最も偉大にして又最も興味ある問題なれども、而も是れに對して一指を染むべき資格ある人は甚だ罕なり。吾人は現代に之を求めて著者に得たり。著者は實に醫學を修めて生理學を專攻し、而して生物學、人類學、哲學、文學、美學に於て造詣する所淺からざる人、眞に此千里の馬を相すべき好箇の伯樂たり。

茲に此新しき伯樂が冀北の野を過ぎて齋せる駿馬は卽ち此『人性論』一篇となす。以て好學の士の淸讀を待つ。

本書内容

□地球上第一の人 □太古の日本住民 □人體美の一節 □男性美と女性美 □子と人生 □力士の研究 □人生の搖籃 □色彩と人性 □人類發生の理論 □人生美

□定價二圓卅錢 □郵稅十二錢 □菊判總布函入 □寫眞七十餘枚

禪畫奇譚 一棒一喝

好評再版

禪畫洞 池上文僊先生編

□定價六十五錢□郵稅六錢□三六判總布

新修養曰く――文僊畫伯の禪畫に巧みなる世既に高評あり。今畫伯古今の禪林碩學の逸話奇行を掲ぐると共に、畫伯得意の筆を驅りて一棒一喝を揮ふ。文は畫を得て更に精彩を加へ、畫は文と相待ちて其の妙味を發揮し、悟道の境地豁然として讀者の心胸に現れむ。喝！

第六十八版（實業之日本社編纂）

岡田式靜坐法

改訂 增補

□岡田先生靜坐創刱の經歷

岡田式靜坐法が、精神を修養し、體力を增進し、萬病を快癒し、國民の心身改造に偉効あるは、社會の公認する處なり。本書は此の良法を普く實行せしめんがために著せしものにして、今や實驗者數百萬を數ふ。

□靜坐法の原理及び其方法

本書異常の大好評の下に版を重ねる六十版、紙型殆ど磨滅す。年を經る三年、書中に掲載せる實驗の諸君も其後の進境また別人の觀あり。卽ち增補改版全く面目を一新して之を世に問ふ。

■定價六拾錢 郵稅六錢三五判 ■總布紙製六百頁 ■金文字入 ■岡田先生靜坐姿勢寫眞入美本

基礎健康法

再版

定價五拾錢 郵稅五錢 姿勢寫眞四五入美本

□一日も早く實行し體質を改造せよ□

本書は我敎育界に於て、今名高き日比野校長が、多年自ら數千の學徒を訓練したる實驗により得たる確信を語れるものにして、最新最良の運動法なり。されば一般學生は勿論、世の敎育家は再讀三讀し、一日も早く採用實行せられんことを切に望む。

愛知縣立第一中學校々長 日比野寛先生著

實用的强健法

六版

伊藤銀月先生著

其青年時代體格虛弱、根氣なく精力なく意志薄弱到底實社會に活動するに堪へざりし著者銀月先生の苦心發見せる三十秒間の緊張法と三十秒間の弛緩法。著者は之に依りて今や體格偉大精力絕倫二日三晩不眠不休毫も疲勞を感ぜざるに至る。切に薦む。

□一分間の運動にて偉効ある强健法□

半生の懺悔

再版

□定價七拾錢　郵稅六錢□
讀書界驚異の珍書
□三六判總布函入□

茅原華山先生三名著

波瀾重疊に富める著者が其半生を顧みて腸九回茲に赤裸々に其半生を告白す

其の幼年時代の卷には、抱腹絶倒すべく、苦學時代に至りては、泌々胸を裂く。華山先生の面目愈々躍動するは、其の記者時代の卷にして、文章流麗、神韻漂渺、一個の自叙傳小說とも見るべく、修養錄とも見るべし。現代青年必讀の好著。

□八版□

小品文集 銀杏の葉蔭

□定價五拾五錢□
□郵稅六錢□
□三五判總布函入□

全篇悉く是れ無韻の詩切々讀むに適し朗々誦するに適し蓋し近來の一大快著

華山先生、辯を能くし文を能くし、一度演壇に立てば聽衆悉く熱狂し、筆を執れば讀者悉く其美に心醉す。熾烈鐵を熔かす火の如き情緒、艶麗眼を眩ずる花の如き詞藻、是れ先生の文章に非ずや。苟も文字を解する者は本書を讀まざるべからず。

黎明

定價壹圓廿錢　郵稅四錢　圓八錢　六判

詩人的熱情と燃犀なる直覺力を以て時代を徹底的に說ける絢爛雄渾の大文字！本書は人生の有ゆる失望と苦痛を經驗せる著者が其數多き悲痛と長き疲勞を經て、求め得たる歡喜を物語れるもの言々是れ血是れ涙。文章華麗、强烈に讀者の心琴に共鳴す。

田山花袋先生著

東京の近郊

定價壹圓五拾錢郵稅八錢
三六判總布七百五十頁

□再版□

作家として紀行文家としての花袋先生は世既に定評あり。本書は先生年來の宿構に成れるもの。其武藏野を描き、水郷の美を寫し、日光箱根の山水を叙するの筆は、技眞に神に入る。之を一個のスケッチ集として見んか。卓越せる藝術品たり。郊外曳杖の案內記として觀んか。凡て首都を中心とせる山河、社寺、湖沼、花木等の景趣は、細大洩さず、或は歷史を說き、地誌を述べ、土俗人情の特徵を語る。眞に是れ一大珍書なり。

郊外曳杖の案內記！東京在住者は勿論一般郊外居住者に取り至便懇切の件侶

出口競先生著

校歌ロオマンス

定價六十五錢　郵稅六錢
三六判全一冊顏美本

苟くも學生間に流行の歌と、それに包まれたる學生の春と、青春のロオマンスとを描き出して興趣津々。一讀血湧き肉躍る。

內容一部

一高寮歌物語。デッカンショ節と春は春は。藏前振り。一橋と三田と。木曾節と佐度節。早稻田の森から。市ヶ谷高臺にて。越中島の情緒。チャカホイ踊り。百萬石の城下で。江田島あたり。銀杏城下の高唱

好評嘖々忽ち六版

祖國を顧みて

定價壹圓郵稅八錢四六判總布箱入

法學博士河上肇先生著

曩に歐洲より歸朝せる著者が、其の徹底せる觀察と深遠なる學殖より、西洋文明を解剖せるもの。赤毛布式淺薄なる見聞錄に非ず。卓越せる思想、警拔なる識見到る處に潑剌として讀者を捉へ、之を讀むに黑暗裡より光明に出でたる如く、西歐の制度文物の眞髓を始めて了解するを得。

內容大略

西洋の分析主義と日本の一纒め主義○日本の家族關係○西洋の智識と日本の智識○西洋に於ける物質的文明○鍵の國○障子の國○貞操帶○釣錢の出し方の相違○人ワイルドの日本藝術觀○人間の茶碗と犬の茶碗○西洋の便所○尊き日本民族の血○乃木伯爵家の斷絕○人は道具を製造する動物なり

十人十色 名物男

大町桂月先生著

定價壹圓郵稅八錢 四六判總布美本

桂月先生近來の快著
興味津々一讀三歎

再版

萬朝報曰く

「桂月の文章は名物なれども、其の人物評はわけても名物たらざるを得ず。洒脫なるが如くにして、氣骨あり、溫情に富みて浮華ならざる人物の反映、最も顯著なればなり。生きたる蘇峯、漱石等も交りたるが、子規、紅葉、嶺雲、東圃、乃木等數十篇、多くは故人なり。」

東草水先生著

飜譯の仕方と名家飜譯振

眞に英語の實力を養はんとする者は來れ

語學力の緊要にして之が養成の困難なるは萬人の認めて以て然りとなす所なり。斯界の先覺草水東俊造先生夙に此點に着眼し、豐富なる實例と痛烈なる文章とを以て茲に飜譯の眞精神眞面目を說き、筆を轉じて諸名家の飜譯振を批評すると縱橫。英語青年無二の參考書たり。諸子一讀再讀せよ。

定價八十五錢 郵稅八錢 菊半截函入

安價滋養

食物の研究

最新刊

內容大略

人類の食物：食物の種類：食物の效用：人體の化學的研究：食物の化學的研究：消化及吸收：食量の標準：肉食主義と菜食主義：穀〆：豆類：葉菜類：根菜類：蔬果類：海草：菌類：調和品：香味料：果實：砂糖：獸鳥肉：乳及其製品：鳥と卵：魚貝類：鹽水飲料酒等

農學士伊藤一次先生
ドクトル・オブ・フイロソフイー三上正毅先生共著

□食物の研究は吾人生活の最大要件にして、其研究は國家經濟の上より緊要の事とす。歐洲の大動亂は獨逸人に食物の研究の必要なるを痛切に教へたりと云ふが、此研究は我國民の頭上にも懸れる大問題なり。

□之を各人の家庭について考ふるも、如何にせば安價にして而も滋養なるものが、美味しく口にするを得るかは、修養ある主婦の等しく苦心する處なり。本書は其の食物を化學的に研究せるものにして、理想的の料理を作るには缺くべからざる參考書なり

定價六十五錢　郵稅六錢
四六判頗る美本

□文學士 高桑駒吉先生著

日本歷史通覽

□好評嘖々□

努力十年遂に大成

新しき要求を以て生れたる、新しき歷史にして、內容豐富、史實正確、本年度に至る文部省檢定試驗問題及び各高等諸學校入學試驗問題は、悉くこれを網羅す。中等諸學校及び小學校に歷史を擔當する各職員、文部省檢定試驗に及第せんとする人々、各高等諸學校の入學試驗を受けんとする士に取りては、無上の良參考書なり。

定價四圓郵稅十六錢
菊判總布金文字千三百頁大冊

作法文範 **書翰文大全** 三版

文學博士 關根正直先生
文學士 高木尙介先生 共著

□定價一圓八十錢□
□郵稅十二錢菊判總布大冊□

手紙の下手は一生の損、一封の書狀一枚の葉書が吾人の幸不幸、毀譽浮沈に關することあり。恐るべきは手紙の書き方

本書は先づ其作法篇に於て業務用、社交用、其他百般の手紙について其腹案法より構成法、文句の修練、手紙道德等一々文例によりて縷說し盡し殊に新舊書簡文を對照して現代書翰文の理想を敎ふ

326
443

終